

多面的・多角的に
歴史をとらえよう！

東アジアの視点で、 日本の歴史を学ぶ



国立歴史民俗博物館 仁藤敦史

帝国書院の『社会科 中学生の歴史』の重要なコンセプトは、国際化時代にふさわしい教科書です。学習指導要領においても「東アジアの中の日本」「世界の中の日本」といったグローバルな歴史理解が求められています。古代では、日本列島の動向だけでなく、東アジアの動向に視野を広げることが求められますが、それは単に外国史の分量を増やして他国を理解することだけではありません。現在でも強固な観念として存在する、日本列島における「日本」（国家）および「日本人」（国籍）という枠組みをどのように相対化するか、東アジア世界との相互交流の中で考えていくことが必要だと考えます。

卑弥呼と中国王朝の関係

まず、古代の東アジア世界において倭国の歴史の展開が自己運動するものではなく、当時の超大国たる中国王朝の政治的影響下に置かれていたという客観的な情勢をまず理解する必要があります。

たとえば、なぜ卑弥呼は魏に使者を送り、「冊封」という中国を中心とする秩序に組み込まれなければ、倭国の「平和」を維持できなかったかを考えてもらいたいのです。しばしば、卑弥呼は「邪馬台国の女王」と説明されますが、『魏志』倭人伝には30か国ほどから構成される「倭国」の女王として諸国から

「共立」されたことが述べられています。この「倭国」の女王としての地位を魏に承認してもらう必要があったのです。中国の歴代王朝は中華思想を前提に、一貫して周辺諸国との関係は対等ではない臣下として位置づけていました。当時の中国は他国を圧倒する文化的、軍事的優位を保ち、これが政治的関係に反映したわけです。中国との外交交渉には、漢字の習得が前提とされており、金印のような印章の授与が、漢字を用いた文書のやりとりを象徴しています。古代東アジアにおける漢字文化の急速な普及には、こうした政治的な必要性が背景にあります。中国王朝の圧倒的な政治的・軍事的な権威を背景に、銅鏡や鉄に象徴される先進文物の窓口として、卑弥呼は倭国の内部で求心力を維持することが可能となったのです。日本列島という狭い範囲の動きだけで歴史が完結したわけではなく、朝鮮半島の窓口を経由した中国王朝との関係が、倭国のまとまりを維持する要素として機能していたわけです。

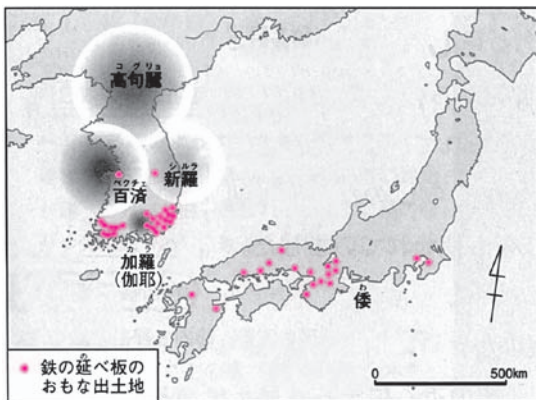
当然ながら、当時の倭国の範囲には、まだ北海道や沖縄は含まれておらず、他地域と交流しつつも独自の歴史的展開をしていました。

倭と朝鮮諸国との交流

つぎの倭の五王の時代においても、ヤマト王権が南朝に朝貢したのは、朝鮮半島にお



奈良県の古墳から出土した鉄の延べ板（東京都 宮内庁書陵部蔵） 帝国書院「中学生の歴史（最新版）」p.38



3～5世紀の朝鮮半島と倭（前掲書p.39）

る鉄資源の流通問題が背景にありました。倭国の内部において、鉄製品の自給は、まだできない段階で、上質の鉄素材の供給は朝鮮半島に依存していました。鉄素材は、生産力を高める農耕具や戦闘に必要な武具として高い需要があり、ヤマト王権がこの配分を独占することにより、諸豪族に対して求心力を持っていたと考えられます。この教科書では、「奈良県の古墳から出土した鉄の延べ板」の写真と鉄素材の用途や朝鮮半島での鉄の延べ板出土地を比較検討することにより、鉄素材をめぐる朝鮮との交流を読み取ることができるよう構成しています。ヤマト王権にとっては、この鉄素材や先進文物の安定的供給が維持できれば大きな支配力を配下の豪族たちに示す

ことが可能でしたが、軍事的・政治的失敗により供給が不安定になれば、倭王の王系が交替する可能性があります。こうした不安定な政権であるため、中国王朝に対して高句麗との戦いを口実に、多国籍軍の司令官という立場に立つことによって、朝鮮諸国に対する軍事指揮権（領土支配権ではない）を要求しています。中国王朝の権威により倭国は朝鮮半島諸国に対して優位な立場に立とうとしました。ここでも中国王朝の東アジアにおける秩序に組み込まれることで、相対的に有利な地位を求め、国内豪族にも將軍号を与えて秩序を維持しようと試みました。また、本来は中国王朝が周辺諸国との支配関係の確認に用いていた刀剣の授与の慣行（卑弥呼も五尺刀二口を魏から与えられた）を、ヤマト王権は配下の豪族たちにも転用しておこなっています。教科書の稲荷山古墳出土の鉄剣はこうした事例です。中国の支配方式を国内支配に利用する点も東アジアの視点により明瞭になります。

「聖徳太子」の外交

推古朝の対隋外交は、しばしば「聖徳太子の対等外交」として評価されていますが、現



稲荷山古墳

ワ 獲
カ 加
タ 多
ケ 支
ル 盧
大 王

江田船山古墳

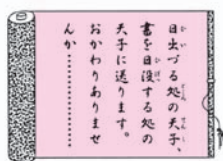
ワ 獲
カ 口
タ 口
ケ 口
ル 盧
大 王

(全体 長さ73.5cm)



▲① 中国(隋)の皇帝(中央)

聖徳太子が小野妹子にもたせた中国の皇帝への手紙（前掲書p.42）



▲② 聖徳太子が小野妹子にもたせた中国の皇帝への手紙



▶③ 聖徳太子と伝えられる肖像

実の両者の力関係には歴然とした差が存在していました。倭国からの国書に対する皇帝煬帝の「蕃夷の書」「無礼」との位置づけは、倭国の主体的な意図とは異なり、客観的には深刻に評価すべきものでした。中国の世界秩序において「無礼」「蕃夷」との評価は、外交の相手としてもまともに評価されないほどの低い扱いであったことは明らかです。

これより以前、600年に遣隋使を派遣していま

すが、その時にも相手にされなかったらしく『日本書紀』には記載がありません。607年の再度の遣隋使までの間に、冠位十二階や憲法十七条などを急ぎ整備して、中国に対して文明国であることを示そうと努力しています。このように二度までも超大国である隋に「夜郎自大」な外交オンチぶりを示しているにもかかわらず、なぜ隋からの侵攻を受けなかったのかという問いこそ重要です。『旧唐書』には、631年以降、倭国が遠距離に位置することに同情して毎年の朝貢が免除されたとあり、さらに倭から日本への国号の変化についても使者の報告を信用せず、倭国に対する関

心が薄い点が指摘できます。理由のひとつは、倭国が朝鮮三国とは異なり、「冊封」されない「絶域」に属し、定期的にししか朝貢をおこなわなくとも許された「化外慕礼」の国として位置づけられ、直接介入を免れたこと、もうひとつは隋と高句麗との敵対関係により、倭国の政治的扱いが無視できないものであったことが指摘できます。

厩戸皇子(聖徳太子)は推古朝における有力な皇子ではあったけれども唯一の権力者ではありませんでした。蘇我馬子や推古女帝の存在を含めた権力構造であったことを軽視することは正しくありません。推古紀には「皇太子」の事蹟が多く記載されていますが、少なくとも隋からの使者に対応したのは蘇我馬子でした。推古女帝についても単なる「中継ぎ」と位置づけられることが多いのですが、7世紀の東アジアにおいては、中国や新羅でも女性君主が出現しています。こうした女帝出現の動向は偶然ではなく、いずれも律令制という共通の成熟した支配方式を導入した国家であり、君主に要求される資質が軍事から内政に転換し、君主の継承が血縁的に狭い範囲に固定し候補者が限定されたこと、などが背景にあったと考えられます。「聖人」ではない厩戸皇子の位置づけを、東アジア状況の中で冷静におこなう必要があると思います。

現在改訂作業を行っている教科書では、現行版よりもさらにこうした東アジア的な視角を重視した内容になる予定です。